八百屋新聞　特別号　2012年4月21日（土曜日）

刈屋さんちの安心野菜

2011年12月3日 早稲田駅伝 in 国立競技場にて撮影

―第三号あいさつ―

4月に入りようやくこの冬も終わりか…と気持ちを春に切り替えようとしていた矢先、また一晩で15センチメートルもの積雪がありました。今年はなかなか切れない雪との縁。とはいっても、棚田の畔から一足早く顔を出したフキノトウ、外を揚々と歩く人の足音が春の訪れを告げています。

栃尾で就農して迎える2年目のシーズン。1年野菜を育ててみて、水はけ、風当たり、土の深さ、肥沃度など畑の性質がだいぶ分かってきました。ビニールハウスも手に入ったので、新たな野菜づくりにもチャレンジしていきます。またニワトリを飼い、田んぼを作ることで、循環型農業に取り組めたらいいなと思っています。耕地面積も増え、生産量も上がるので、遠隔地へお住まいの方むけに野菜セット「栃尾からのお裾分け」の販売を始める予定です。興味のある方はぜひお問い合わせください。今年の収穫は5月上旬から山菜が、6月中旬頃から野菜が採れ出します。本紙も引き続き作業の合間を縫って執筆していきます。どうぞ今年もよろしくお願いします。（兄）

八百屋新聞
第三号

刈屋さんちの
安心野菜

〒940-0145
新潟県長岡市
栃堀 2885-6

電話 /FAX
0258-77-2563

E-mail
kariya.br@gmail.com

ブログ
http://blog.livedoor.jp/kariyabr/

ツイッター
kariyabr

冬の仕事

一般に「仕事」とは賃労働のことを指す。しかし、田舎、こと雪国ではお金とは無縁の仕事が多数ある。家、庭木の冬囲い、屋根の雪降し、道路の除雪：自然に合わせた仕事が常時入ってくる。しかも重労働ばかりだ。独居老人世帯が雪国で暮らしていくのが大変な理由、週末は屋根に上がらされる若者が土地を離れていく原因になっている。でも雪が降る利点もある。獣害が少ない：明確に農閑期になるため切り替えがしやすい：除雪の仕事で現金収入を得られる等。雪国で様々な仕事を組み合わせることで、農業をしながら生きていけるということを、まずは自分たちが実践して負のイメージを変えていけたらと思う。（兄）

栃堀巣守神社裸押合大祭

神社の本殿にところ狭しと詰め込まれた褌一丁の男たち。「おっせ、おっせ！」の掛け声とともに、団子になって、隣りの人に体当たりしては、あっちこっちに転げ回る。隣りの男の汗、なんだかよくわからんが撒かれている日本酒「越ノ鶴」（たぶん）、本気で踏まれまくる足、腹に当たる肘、滑る床、倒れるおっさん、そしてきつく絞めすぎたわらじ。痛い、とにかく痛かった。しかし空を舞う札（※景品と交換できる）は俺にかすりもしない。裸押し合いはこんなにキツイとは…。あきらめかけた、その時！　札が目の前に！…はテレビのなかの話し。もうダメだと思って、助けて母さん！とばかりに、端っこのほうへ一目散に逃げ落ちる。しかし、そこに待っているのは、押合歴30年と見受けられるザ・ベテランの地元先輩方。「休むな！押してこい！」と一喝され、再び喧騒、いや戦場に放り込まれる。札は欲しい。けど痛い、強い、隣の人マッチョ過ぎ。もうムリ。と、思ったら目の前に札だ！　すかさず飛びかかる俺。と、他多数。取った！　と思ったけど、たぶん隣の人も自分が取ったと思っていて、手を離す気なんてさらさらない。「おーい空気読めよ」なんて言っても聞いてくれそうな感じじゃない。札の位置はイーブンな感じ。「くれ札これ俺絶対負けませんよ云々」とかなんとか考えるというか祈っていたら、なんかどうなったかよく覚えてないんだけど、札をゲットした。（弟）

特技「物をもらうこと」

正直なところ、前々からビニールハウスはあったらいいな、と心の片隅では思っていた。枯渇燃料を使って作られたものに頼んのもどうかねー、と意地を張っていたものの。今年からニワトリを飼うことになった。でも大工に小屋を建ててもらうようなお金はどこにもない。それじゃあ、あちこちから廃材を集めてきてセルフビルドでやったろうじゃねーかと思っていた。そんな4月16日、いっぺんに両方手に入ることになった。隣町の農家がいらなくなったハウスを、親戚が小屋を、それぞれくれるという。私の師がいっていた言葉を思い出す。「ほしいものは待っていればたいてい手に入る」。（兄）

今年栽培予定の野菜

昨年は栃尾の気候条件、畑の性質など分からないことだらけで、野菜の出荷予定は立てたもののことごとく外れてばかりでした。2年目の今年はある程度予測できるようになってきたので、以下のとおり現在植付予定の野菜をご案内いたします。

果菜類（穀類、豆類）

トマト、ピーマン、シシトウ、**ナス**、かぼちゃ、**オクラ**、**ズッキーニ**、キュウリ、ゴーヤ、さやいんげん、枝豆、トウモロコシ

葉菜類

小松菜、**水菜**、ホウレンソウ、**ルッコラ**、パクチョイ、キャベツ、白菜

根菜類

大根、ラディッシュ、**聖護院大根**、**カブ**、ニンジン、ゴボウ

イモ類

ジャガイモ、サトイモ、サツマイモ

香菜・ハーブ

にんにく、しょうが、長ネギ、玉ネギ、しそ、さんしょう、みょうが、イタリアンパセリ、バジル

山菜

フキ、わらび、コゴメ、うるい、あかみず、タラの芽

（※太字は昨年出来がよく、好評をいただいたなどの理由で、今年は植付量を増やす予定の野菜です）

【トラックマンションの旅】

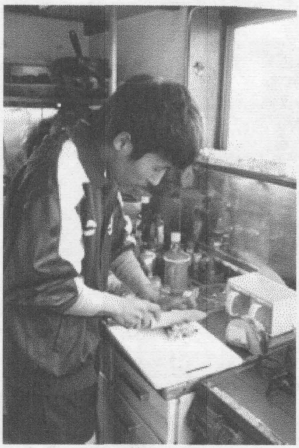
雪が積もり始めた12月初旬、突如刈屋高志を激しい衝動が突き動かした。軽トラで全国を旅して回る自分の姿を想像すると、明け方まで眠りにつくことができなくなった。翌朝、早速合板を手に入れた彼は、「トラックマンション」の制作を開始した。「トラックマンション」とは、彼の師である稲垣尚友氏がトラックの荷台に廃材で建てた家のことだ。師に倣って3日がかりで軽トラの荷台に居住スペースを制作。1週間の「試走」を経てトラックマンションの改善を施した後、2月27日から3月30日までの33日間、四国、九州、中国地方を回る旅に出た。

出立前、複数の友人・知人に西日本を旅するという話をすると、「そうか！　それじゃあ、あの人に会っといたほうがいい：」と30名以上の西日本在住の人を紹介された。もちろん全て訪問する余裕はなかったので、日程と相談しながら訪ねて回ることになった。「この人がおもしろい」以上の細かい事前情報を全く聞いていなかったにもかかわらず、会う人はみな、自分自身を問い直さざるを得ないような魅力的な生き方をしている人ばかりだった。徳島の人里離れた山奥で1人、和紙を漉いて生きてきた男。高知の山中で自然に遊んでもらいながら古くて新しい暮らし方を模索する青年。愛媛の天まで届きそうな段々畑でみかん農家を始めた夫婦。「限界集落」「後期高齢者」「独居老人」なんて言葉を超えて、現世を楽しく生きる術を知りつくした天草の老婦。我が子

のために、土地を、社会を持続可能な形に変えていこうと情熱を注ぐ阿蘇の夫婦。中国山地の真ん中で、人の循環をつくり地域を開き直していこうとする若者たち…。そんな出会いの中で、自分が栃尾で果たす／果たしたい役割が見えてきた。半分内の人であり、半分外の人であるという立場を活かして、外の人と地域の人を結ぶ触媒のような存在。具体的に今後やっていきたいことは、内外から人が集まるゲストハウスを兼ねた「私設公民館」を建てる、地域教育の拠点となるような寺子屋を運営して子どもが外に出た後も地域に戻ってこれるようなきっかけをつくる、空き家を借りて外部から入ってくる人に対して紹介する、また集落に張り巡らされた水路や山林を活かして小水力発電、木質バイオマスなどの自然エネルギーの導入…などを実践していきたい。でもまずは農業で自立して生きていくことを実践して地域内で認められるようになっていきたい。（兄）

旅の報告会in栃尾

4月15日(日)に栃尾の飲食店アルベーロにて旅の報告会を開催した。当日は栃尾と近郊地域から、年齢も職種も多彩な30名の参加者が集まった。第1部では旅で出会った人や出来事をスライド写真を使って紹介、第2部では集まった参加者同士で「自分の住む地域」をテーマに意見交換が行われた。参加者からは、「ここまで若者が一生懸命地域のことを考えているとは知らなかった」「こんなに人が集まれば本当になにかできそう！」「もっと元気な栃尾になっていく予感がした」などの声が聞かれた。また旅でお世話になった愛媛の上原夫妻からこの日のために送られた甘夏が参加者に配られ、好評を呼んだ。（兄）



残雪も徐々に薄れ始め、屋外での作業も少しずつ幅が広がってくるこの時期の刈屋家の仕事ぶりはまさに「百姓」。毎日の天気と相談しながら、実に多種多様な仕事に取り組む。何をやるか、どうやるか、いつやるか、は自分の想像力次第。ここでの仕事は受動的に与えられるのではなく、能動的に想像・創造される。そんな仕組みが私の「労働意欲」と「好奇心」の両方を見事に満たす。「生きている」という実感。あるいは、錯覚。

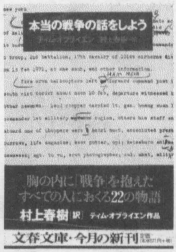
それにしても、日々取り組むべき仕事が違うというのは、働く側からすれば本当に楽しい。一つ一つ異なる作業に、頭も体も隅々まで使って挑む。街での生活では使わない体や頭の「筋肉」が良い具合にほぐれ、「**私という人間ごと**柔軟になっていく」、そんな感覚を味わう。ついでに夜はビールも味わう。「働いた後のビール」、その暴力的とも言える引力には抗い難い。どうやら着地点を完全に見失ってしまったようだが、紙面の都合上そろそろまとめに入りたい。私は四月八日から一週間「仮インターン」と称して、刈屋家で「協働生活」をさせて頂いた。月末からは正式に「インターン生」として受け入れて頂く。いつまで居られるかはわからないのだが、この解放的かつクリエイティブな環境で様々な仕事や人と関わり、謙虚に実直に、経験を自分の糧としていきたい。

（自称「栃尾のラファエロ」織田和徳）

《今号の1枚》
～豪雪～

1階が完全に埋まってしまうほどの雪。今年は本当に長い付き合いになった。来年、また会おう。

《晴耕雨読―今号の1冊―》
～Tim O'Brien『本当の戦争の話をしよう』文春文庫～



「本当の戦争の話というのはぜんぜん教訓的ではない。それは人間の特性をよい方向へ導かないし、高めもしない。」（117項）ベトナム戦争に従軍していた著者が、自身の体験をもとに創作した短編小説集。

不自然に歪められた普遍的な物語の下に埋もれる個別的な物語＝「本当の戦争の話」を、著者は「虚構」という魔法を使って救い出す。「戦争×文学」というテーマに迫る著者の自伝的フィクション。（織田）

【編集後記】

雪が解け、春の日差しを浴びているうちに、今年はやってやろうじゃん、という気持ちになっていた。栃尾が中途半端に雪が降る地域でなくてよかった。年中野菜を育てられる環境であれば、気持ちを切り替えることができず、容易に思考が硬直化してしまうだろう。ビニールハウスを建てて自然へ抵抗してみようなんて気は全くおきないような豪雪を前にして、逆に雪に合わせた暮らし方ができるんじゃないか？　という考えが生まれた。この冬は、兄弟それぞれが自分なりに新しい雪国での暮らし方を模索した。迎えた春。蓄積したエネルギーが、雪解け水とともに奔流となって流れ出す。（兄）